The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新中国250時間 : 昭和50年8月11日～21日
Author(s)	磯, 典理
Citation	大阪公衆衛生. 1975, 34, p. 18-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「新中国250時間」

——昭和50年8月11日～21日——

大阪市立弘済院附属病院
磯　　典　理

新しい中国医療

解放前の中国の医師は都会に集中し、辺地は医師不足のため長征中の紅軍の多くの医療担当者は針灸を学び、人民の医学として辺地住民に医療奉仕を続けてきた。西洋医学を修めた医師は人口1万人に1名程度で極めて少く高官貴人のためにあったが、解放後は医療看護に当って、人民に奉仕する。予防に重点をおく。中国の医薬と西洋医薬の統一。そして、保健工作と大衆路線との結合と云う四つの基本原則がうち立てられた。

１９５４年中華医学会の中で西洋医、伝統的中国医に分れた医師達の結合が行われその結果、古い方式で教育された中医５０万人の意識革命がおこり、多くの家伝や秘法は公開され、中医は西洋医と同等の権利地位が保証された。しかも中、西をとわず医師は人民の為に奉仕することが強く要請され、都会の医師は下放と称して辺地にて働き、都市と農村の隔差の是正が行われた。特に従来医療の恩恵のうすかった辺地農村に文革以来、初歩的とはいえ近代中西医学を身につけたはだしの医者即、赤脚医生（エリートの白衣族に対して）が入っていったことは素晴らしい成果であった。

1950年頃より北京、上海、西安、ハルピン市や他の各省に於て針灸の研究機関や中医学院が設立され、その中で伝統的治療法に対する分析検討や中西医結合による臨床的研究が行われている。これは東洋の総合と西洋の分析という異なった思想を、医療という場に於て西洋の技術と東洋の心の融合であり困難ではあるが、中国にとっても世界にとっても重要な仕事であり、又人類にとってもその達成が切望されている。

中国医学の伝統である１本の針、１束の草を利用して病気をなおすことは簡単で実行しやすく、経済的で治療効果も非常によいので大都会の病院の針灸科は伝統的な親しみも加わって大歓迎をうけ、聾、小児マヒ、近眼等の治療に迄応用されている。又入院患者には伝統の煎薬等が多量に使用されている。

伝統的中国医学は病気にかからない、即予防に重点をおいている。従って人体と宇宙との完全な調和に根拠を求め、四季の変化に生命のリズムを順応させ、個人の健康への原理に、食事療法、性衛生、針灸術、運動療法、水治療法、肉体的訓練、呼吸法等あらゆる療法の駆使発展へと結びつく。

今話題の針麻酔は上海で行われた５万例近い患者、100種類以上の手術の内、一例として予想に反するケースは発生しなかった事実からみて、はり麻酔の安全性を強調している（上海市はり麻酔協同工作グループ）。しか

針麻酔による手術中の患者、「のどがかわいた。」と水をもらう。

しこの手術に際しては、患者の治療に対する積極性を発揮させるため医師と患者の絶対的信頼感が前提条件のようである。針麻酔や針治療に使用される針はすべて人民解放軍製造のマークが入っていることは、長征の時代の名残りをとどめているのかもしれない。

何故ツボに針をさせば麻酔がおこり脳手術でさえ可能なのか、その理論はまだわかっていない。ヨーロッパ文明の優越性を信じてきた我々は、科学的理論の判然としないものは信頼しにくいと、つい考えがちだが、中国では理屈もさることながら、癒ればいいという極めてリアルで実利的な国民性もあり実践が先行し理論はあとについてくるといっている。その理論づけの為各針灸研究所においては、解剖学的、神経生理学的等々の研究もされている。この針麻酔を媒体として、中西医学の結合がますます前進しているのが現実の姿である。

為人民服務の5字のスローガンは人命尊重という医療の基本でもあり、この考え方は中国医療の随所にあらわれている。

わが国においては手、足が切断された場合一般には切断肢をあきらめ断端の処理だけで終る場合が多いが、中国人民は断肢を氷で冷して病院にもってくる。いいかえれば断肢結合の可能を確信しているようである。実際に切断後6時間以内であれば80%成功すると北京積水潭病院では云っていた。このためには、患者、医師、病院、社会全体が一体となって患者を治療している姿は敬服に値する。このことは広範囲重症熱傷処理にもいえることで、我々は全身の火傷面積60%をこえると治療の極限と考えていたが中国では重症火傷患者に自体皮膚と異体皮膚を利用、一片が大豆大の自体皮膚を、大片の異体皮膚の中にモザイク状にはめこんで、第三度の広範囲火傷を処理し更に薬草を利用して完全に成功している。或は骨折治療に我が国の如く絶対固定せず、局部の固定のみで治療上には局所に適当な運動も必要であるという、動と静の理論の応用等高いヒューマニズムを考えさせられた。

今世界に科学の行きすぎが批判されているときに伝統中国医学は非常に魅力があり、ブーム化しているけれども、ブームにのって科学の方法論を無視した「科学以前」への復帰であってはならない。

はだしの医者

中国全人口中一握りの高官貴人には潤沢にあった医療、一方、医者も薬もない貧農の村を有医有薬にかえ、庶民の医療を豊かにするために文化大革命の嵐の中から生まれてきたのが「はだしの医者」で、初歩的医療の訓練をうけた後人民公社で医療業務と共に農民と一緒に水田の中にひざ迄つかってはだしで働くから、エリートの白衣族に対する抵抗の意味もあって中国語で赤脚医生、半農半医生が正式の呼び名である。自分の責任で食い、かつ住んでいる国家の中の小国家、即、ギリシヤの都市国家ポリスのような中国独自の〝人民公社〟に彼、彼女等は配置され、山里草原辺地をとわずいたるところ6億農民に熱情をもって誠心誠意奉仕する革命的隣組救急医務工作者である。

はだしの医者の活躍により、かつて人民の手の届かない彼方にあった医療を自らのものとし、人民公社が自分の手で自分達の周囲に

はだしの医者、針灸治療、衛生相談、薬草栽培はお手のものです。

ある医療問題の大部分を処理出来るようになったことである。

彼等、彼女等は人民公社の生産大隊（人口2～3000）にある大隊保健所に10名位普通は勤務して、公社の病院の医師や、下放（都市と農村の同一化をめざす運動）した都会の医師達から解剖、生理、聴打診、はり、注射、予防接種、受胎調節、衛生予防工作、薬草栽培等基本的理論技術を学び、かつその実践に三交代24時間制で勤務し、赤ちゃんの具合が悪いと先輩と共に往診に出かけ、又弱った老人の脈をとり、心音をきき、自分達が栽培した薬草等で治療を行う。中には避妊手術や、盲腸手術の出来る人もいるそうである。こうなると、医師、看護婦、保健婦、産婆、針灸師と医療業務のすべてを行っているわけだが、日本のようにやれ免許証だやれにせ医者だなんてことは云わない。要は仕事が出来ればそれでよく、評価は周囲人民が絶えずやっている。それだけ日本よりきびしいが皆の顔は奉仕する喜びで明るい。

利己心を捨て、ひたすら人々のためにつくす彼、彼女の収入は公社員である貧農、下層農民と基本的に同じである。社会主義体制の中における知的労働と肉体労働に対する労働賃金のサンプルとして興味ある給与だと思う（参考、上海郊外、生産大隊のはだしの医者年間所得300元で、農業労働所得100元、往診費、注射費1回5分、助産費1回3元、大隊補助額75元となっている。1元は約160円—新中国医療への道—亜紀書房）全人民が、自分の欲する時、いつでも、わずかな費用で医療サービスが受けられるネットが張りめぐらされているという理想の状態が、地球上の$\frac{1}{4}$をしめる地域でかつ8億の人のため出現しつつあることは人類にとっても又素晴らしいことだ。

上海の街かどで

朝もやの町の通りで老人達が三三五五大極拳で体の鍛錬と健康づくりにはげんでいる。その横を赤いネッカチーフの少年少女がかけぬけてゆく。一方、公園では医師の指導する数百人の治療体操の一団もある。

古来中国では体操や鍛錬法が好まれていた。古く華陀（136～207）は5種類の動物（鳥熊虎鹿猿）の姿態に示唆されて5禽戯という人間の能力を十分に発揮させるための体操を創案した。中国の体操や鍛練法は何れも静と動のしなやかな結合であり、肉体的な高揚と同時に呼吸訓練により心を安らげ煩悩から逃れる精神的

朝の街かどの体操。
72歳の老婆。

健康法でもある。毛沢東主席自身もこの伝統を受けつぎ、若い頃より体育には非常に力を入れ、自らも揚子江を泳ぎ渡り、子供達の少年宮においては体戯の種類も多い。それらはピンポン外交、日中ママさんバレー大会、日中ソフトボール試合へと展開しているが、いずれも記録更新が目的ではなく、健康増進をめざしていることは、医療の原点を予防においているお国柄とあわせて考えられる。

町の朝の体操をやっている人は、男も女も紺かグレー、又は黒の上衣にズボンの労働服で、かつての有産階級の着ていたぞべっと丈の長い、いわゆる中国服は姿を消した。質素な労働服は一団をきわだたせる制服であり、一方、個人にとっては素性や思想をめだたぬようにする保護色の役を果しているようだ。

解放前の中国の町を知る人にとって、朝の街角で体操に打ち興じ、塵一つない町を想像出来たであろうか。あの雑然の町からこの整然の町への変ぼうを!!

社会主義革命により制度の変革は簡単に出来ても人間のものの考え方を変えることは容易ではない。「為人民服務」という5文字のスローガンが既に民族の血脈の中にとけ込んできている。その証拠に没法子(メイファズ)という言葉がきけなくなった。人間を教育と再教育を通じて形をかえてゆくことの出来る姿を如実にみせられた。「各人からはその能力に応じて、各人からはその必要に応じて」という高い目標をかかげて、一種の道義的に白熱した状態の中に人々は教育され生きているようにみえる。

集団生活

またたくネオンもなく、極めて健康的に早寝の夜があけると、街の人々の活動は朝もやをついて始まる。

大極拳にうっとりと夢我の境に入る老人の集団、赤いネクタイをなびかせてマラソンをやっている子供の集団。この集団を組むことは保育所、幼稚園の時からがっちりとつちかわれる。

少年宮で民族楽器の練習

上海虹口の少年宮、その素晴しい建物の中で小学生の校外活動が行なわれている。絵画、刺しゅう、体操、卓球、コーラス、民族楽器の合奏、模型飛行機や船の制作、きのこ栽培針灸実習等、その道のベテランから充実した教育をうけている。教育の基本のすべては政治教育であり、少年宮はその場であり、そこの壁画も政治教育の材料という徹底ぶりである。

集団で生活し、集団で学び教えあい、集団で労働に参加する。このことが人民公社の中でも都会の区民委員会活動の中でも実にスムーズに行われている。人力の大量集中による問題処理のやり方は典形的な中国方式の発露かも知れない。

かつて私達は学校教育と軍事教育をかたく結びつけられ、軍事美談が教課の中にのせられ、学校のどこかには必ず日露戦争の絵がかけてあった。このような教育の根まわしによって富国強兵は国民の常識になっていて、そのため中国やその他の国々に迷惑をかけ、一億一心を誓った戦争に敗れた。　その反動として現在の日本では、自動販売機で切符、酒、タバコ、鰻飯等々をチン、ガチャンと買い求め、ひとりでステレオ、テレビを相手に時をすごし「おはよう」「こんにちわ」は死語と

なり「ナンセンス」「関係なし」と各人各自は分子運動のように勝手きままにすごす生活が多くなりつつある。

中国は今、中国的風格をもった共産主義的人間をつくるべく国全体が大きな実験道場となっている。

政治を統帥の地位におく毛沢東路線の国と、経済を首位におく自由放縦の国の相違か。

首都北京

南船北馬という言葉がある。今日も北京の町の中を荷馬車が、市場の野菜を積んで、又町の瓦礫を積んで往来している。

「昔から中国では米を食べる人間は皇帝になれない。皇帝になれるのは麺を食べる人間だと云われている。おおまかに区分して長江を境にして北は麦、南は稲を作っている。

周王朝より清に至る歴代の皇帝は北方人許りであるが、一方今日の日本の高等文官試験にあたる科挙に合格するのは南方人許りである。北方人は体格がすぐれて堂々とし、南方人は背は低くみばはよくないが才能豊かで、〝北相南才〟即、北方人の容貌と南方人の才能をもつことが中国人の理想である」という意味のことを陳舜臣はどこかに書いていた。

北京は政治都市としてさすがに新中国の首都の貫禄を漂よわせ、道路も広くゆったりと

かの有名な天安門、国慶節にはこの門の上に指導者が並ぶ。

禄も多い。ニュース等で日本人にもおなじみになった天安門、その正面には高々と毛主席の肖像画がかかげられ、それをはさんで、中華人民共和国万歳、世界人民大団結万歳のスローガンが、中国独特の唐紅色の塀に白地で書かれている。町の辻々にも自力更生、為人民服務、馬克思列宁主义万岁等のスローガンがいたるところの壁にかかれているが、商業広告の看板は全然みられない。わが日本では公営企業のバスの釣革の狭い部分にさえ商品の広告が書いてある。

本来日本人という人種は大衆向きの演説をぶったりスローガンをかかげて大衆を熱狂的に引っぱってゆくことは不向きのようだ。たとえ抽象的なスローガンをかかげても国民がついてこないので、いつの間にか空文化してしらけてしまう。中国では毛主席の言葉がそのままスローガンとして実践が直結していることを感じる。

大通りに沿って所々に古い北京のたたずまいをかもし出している灰色の土塀が続きその切れ目の入口から奥にひろがる内庭、その内庭を取りまくようにたっている黒瓦の特徴あるそりをもった平屋根の家々、そして開かれた戸口からはかべ紙を張った部屋が見えている風情は、古い歴史のかもしだすしみじみとした落つきと暖かさが溢れ、足をとどめたいような親しみさえ感じられる。

こんな静かなたたずまいの外の通りを造花のデコレーションをつけ、太鼓をドンドン叩きながらトラックが抜けて行く。結婚式の車かと思うと、長年勤務した工場を無事定年退職した人を自宅におくり届ける光景であった。さすが労働者の国だ。社会主義の国に来たという実感がした。

社会主義国はまま官僚国家に落ち入りやすく、役人的になっていわゆるサービスが悪くなったり、時には圧迫感すら受ける場合がある。しかし上海でも北京でも友誼商店や百貨店、人民銀行、郵便局に立寄るとレシートに

一品残らず品番、値段を書き込むためスローモーションだけれど、確実で非常に親切であったことは印象に残る。

日本から空路数時間、ひととびで北京に着く。日中の交流は今後ますますひんぱんになるであろう。人が動けば物も思想も必ず動く。革命的人間に教育された中国青年にとって外国製品の優れたものは、よりよき自国産への意欲をかきたたせることに役立ちこそすれ、決して卑下してはいないようだ。中国人の暮しは今の日本人の暮しよりたしかに貧しいが「中国は自転車で」という鄧小平副首相のマイペース主義と私達が接した青壮年達から強い自信と気概を感じる。あたかも明治維新の日本の如く。

和同開珎

北京故宮博物館の一室に、全世界の視聴をそばだてた西漢時代の豪族の墓より出土の金縷玉衣、長信宮燈等無数の展示物にまじって西安市内興化坊発堀の2枚の和同開珎の展示が私にとっては印象的であった。

和同開珎は日本最初の貨幣で元明天皇の和銅元年（708年）8月つちのとみの日に近江で鋳造したものである。

遣唐使、留学僧、留学生と共に日本海、或は東支那海を渡っていったであろう日本最古の古銭が、1200年後に訪れた私の前に厳然としてあるのを見て、何十代か前の先祖にめぐりあったような驚きと感激そして一枚の古銭の描き出す流転の幻想!!　それは当時の世界の人々のあこがれの都長安へと回帰してゆく。

大唐帝国の首都として、西にササン朝ペルシャやビザンチ帝国をひかえ、絹の道を通ってキャラバンと共にラクダにのって音楽家、技術者、学者がゆきかい、思想、宗教が交流した国際都市であり、当時長安在住の外人は数千に及んだと云われている。トルファンやペルシャからのぶどう酒が酒屋の店頭に飾られ、金髪緑眼の美女がサービスした姿は李白

北京飯店食堂。各国の人の顔がみえる。

が「長安青綺門胡姫素手もて招き客を延いて金樽に酔わしむ」と書き残している。

今日北京飯店の食堂で顔を合わす東欧、アメリカ、アフリカ、東南アジア、ラテンアメリカ、フランス等々、又北京の町を走っている各国大使館の車をみた時、北京は毛沢東イズムにひきいられるマルクスレーニン主義の牙城として再び世界の人々を引きつけている。

歴史の中に、歴史と共に生き、歴史ある民族の強さというものを感じる。

大衆菜譜

中国料理で宴会と云えば、つばめの巣とかふかのひれが使われる燕翅会席の豪華さを即座に思いうかべるが、私達が中国に於て招待された宴席では、豊富な料理の並ぶ暖かいもてなしの中にもこのようなぜいたくなものはお目にかからなかった。私達の泊った国際的一流ホテル北京飯店の食堂でも庶民用のやきそばや汁そばを注文出来た。

解放後の中国料理は、伝統のうまみを大切にしつつも、つばめの巣等の珍奇なものよりも自給自足をモットーに、手近かで入手しやすい材料で栄養的にすぐれかつ庶民的な料理が多くなっている。

王侯貴族の宮廷料理、一方では食うや食わずの貧民の多かった半植民地の中国が、今日誰もが豊かに食事が出来るようになり、中国

西瓜の大売出し

の書店では大衆菜譜という料理書がベストセラーになっている。封建君主、軍閥に苦労した昔の中国庶民にとって自分の周囲に社会というものも法の保護もなく、たゞ働くだけという状態では勉強どころではなかった。

栄養に富み経済的な現代中国の家庭料理書とも云える大衆菜譜が再版を重ねるということは、中国の主婦の知識慾の向上と、暮しの安定を実感として味わった。

地底の長城

日中友好協会秘書長孫平科さんを訪問した時、彼は配給のズック製中国靴を無雑作につっかけ、上着もなく白い半袖のシャツを着用し、実に気やすく招じいれてくれた。私の、今回中国訪問に際しての御厚意と御教示の礼に対し彼は「私も日本からマルクス、レーニン主義を習いました。その人は川上肇先生からです。勉強はお互です。折角北京にこられたのですから地下壕をみて行って下さい。これは水爆に備えてです。田舎での食料貯蔵用地下壕は完成しました。今堀っているのは人の退避用です」。

かつて2000年前秦の始皇帝の頃に5400キロメートルの万里の長城を築き、13世紀隋の揚帝の治世下に長江、黄河間1700キロメートルの運河を堀り上げた民衆のエネルギーが今、再び新しき国づくりとしてこの地下壕堀りに爆発しているようだ。

あの広い国で水爆退避用の地下濠を堀っている。その国から空路2時間のわが国は戦争を放棄した。しかし戦争は日本を放棄していない。日本は米中ソの三国の対立点の上にのっかって、微妙な三極構造の中に、戦争なんてよそごとのように日々のはかない平和に酔っているようだ。又それしか今の日本には生きようもないのだろうか？

北京の遺跡

北京は古く、政治の中心として過去の遺跡が極めて多く、万里長城、明十三陵、故宮、天壇とかけあしで見学して廻った。

明の成祖の即位（1403年）より清朝最後の皇帝愛親覚羅溥儀迄約500年間皇居であった

万里長城・八達嶺。階段は急で手すりがついている。日中医療交流先遣隊のメンバー

紫金城（東西969メートル、南北756メートル、72万平方メートル）は四川、貴州広西、雲南、湖南等より用材、石材を求めて造営したもので故宮と呼ばれ皇帝の象徴である黄金色の瓦に輝く壮麗な大和殿に始まって、中和殿、保和殿とこれでもかこれでもかとつづき、内廷に入って又乾清宮、交泰殿、坤寧宮と宮殿がつづく。それら宮殿の壮麗雄大規模に、ただただ驚歎すると共に圧迫感と何となく空虚な感がしてくるのは、それが庶民の即ち人間のためのものではなく（庶民を犠牲にして）権力をにぎった人間の権威の象徴という政治力学の上に立っているからであろう。この感は、天のもつ権威を地上の天子が示すために造営した天壇にも通じる。同じことで珍宝館に展示されているもろもろの美術品といわれるものも、いささかねばっこささえ感じられる。ただ金をかけた贅沢品や珍奇品許りで、自然と人間のとりくみの中から出てきた、生活がにじみ出た芸術品ではない。美術や芸術を生活から引きはなすとそれは好事家の愛玩品にしかすぎなくなってしまう。そんな意味から慈寧宮に展示されている解放後各地で出土した品々の中には、ウイグル地方から出てきた正倉院にもある絹のきれ地、先のまがった革の靴、今蒸しても食べられそうなギョーザ等、すぐにも私達が使えそうな物許りで庶民の歴史を知る上で興味深かった。

明の十三陵への参道に並ぶ石獣、ライオン、ラクダ、象、キリン、馬と並ぶ。

八達嶺に登って5400キロメートルといわれる万里の長城をふんでみた時、2000年前、外敵に対する国全体の興亡の歴史、即、人類史の遺跡としての悠大さを感じ、明の十三陵の参道の石獣、石人は同じ帝王の権力の誇示にしても、のざらしの大平原の中に南方の象やライオン、ラクダが実にリヤルに彫刻され、又空想動物のキリンや武官文官等がすまし顔でつっ立って、自然と人間の交りの中にペーソスとユーモアがあって楽しかった。